議論から対話へ

北海道を旅した時、アイヌ文化を継承する団体で活動する青年に出会った。彼は学生時代にこの活動を始め、現在に至るという。一時は一般企業で働きながら活動をしていたが、「アイヌかうちの社員かどちらかにしろ」と社長から言われたことをきっかけに、「アイヌであることはやめられない」と退社したことを打ち明けてくれた。当時を振り返り、「そのころ僕は社長を許せなかった。でも今は違う」という。

その変化の理由を聞くとアイヌの文化で一番大切という「ウレシパ」という言葉を教えてくれた。意味は「学び合い、育て合い」らしい。その気持ちを忘れていなければ、もっと社長と学び合えたかもしれないと悔しそうに彼は語った。

多様な意見が交わされるようになった今、われわれは分断と対立という言葉をよく耳にする。コロナ禍がその勢いを加速させているような気がする。個々の意見が自由に伝えられるようになったことは間違いなく尊い。しかしこれを未来にまで守り続けるには今のままだと難しいような気がしてならない。それは「ウレシパ」の精神が少ないからだ。白黒をはっきりさせるための議論から、学び合い、育て合う「対話」へのパラダイムシフトが必要だと思う。

今年一年の話題は新型コロナに始まり、どうやら新型コロナに振り回されて終わりそうだ。そして来年もこの、なんとも厄介で手ごわい、見えない敵との戦いは終わりそうにない。その戦いで、共に学び合い、互いに育て合う精神を新しい武器としたいものだ。

ちなみに北海道で会ったその青年に咸宜園（日田市）の「ことごとくみなよろし」の精神を伝えると深く感動していた。

われわれは学び合い、育て合いの中でこそ生きていけるのである。

たかみ・だいすけ　日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。

c大分合同新聞社　無断複製転載を禁じます。